

木版本の『華嚴経探玄記』について

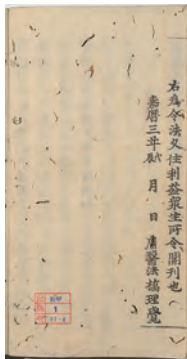
教授 一色 順心
(仏教学)

中国華嚴宗の大成者である法蔵(643-712)は、数ある著作の中で『華嚴経探玄記』二十卷という大部な『華嚴経』注釈書を著わした。それは、東晋仏馱跋陀羅訳の六十巻本を題材として、法蔵自身の仏教観を語るとともに『華嚴経』の経文を逐次解釈するというものであった。法蔵には、華嚴宗の綱要書ともいべき『華嚴五教章』という著作があって、中国・朝鮮半島・日本の仏教者たちによって盛んに研究がなされ、その注釈書も数多く残されている。しかし、『華嚴経探玄記』というテキストは、二種類の系統のものが伝存した。『大正新脩大蔵経』(以下『大正蔵』)第35巻に所収の『華嚴経探玄記』を見てみると、底本となったのは、高麗版であり、それに加えてわが国の古写本・古版本が校合に用いられているのである。その高麗版は、「高麗高宗三十二年(1245)刊本会蔵本」であり、



日本のものは、1300年代刊の二種と「平安時代写聖語蔵本」である。

さて、本学では、貴重書の一つとして、「庸医法橋理覚」(写真1)という刊記のある木版本『華嚴経探玄記』全二十一巻(写真2)を所蔵している。これと同一の版式をもつテキストが金沢文庫にも四本残されていることから、納富常天氏が早くよりこの研究に着手された。納富氏の論文の中で金沢文庫資料だけを選択し収録した論文集『金沢文庫資料の



(写真1)



(写真2)

研究』(昭和57年6月 法蔵館)の中に、理覚版『華嚴經探玄記』についてのいくつかの指摘がなされているので、これを手掛かりにして、このテキストの内容を紹介することとしたい。

理覚が開版を手掛けたテキストには、これ以外に澄観撰の「華嚴經疏 一卷一帖」、同「華嚴演義鈔 四卷八帖」も現存するが、従来の刊行史においては東大寺で開版されたと見なされてきた。しかし、納富氏はこれらの理覚版がすべて称名寺で開版されたと指摘しその論証が試みられている。(前掲書98-102頁)。また、理覚版『華嚴經探玄記』の開版時期について、刊記に「嘉暦三年(1328)」「元徳三年(1331)」とあることから、約4年間をかけて完成したことがわかる。本学蔵理覚版『華嚴經探玄記』にのみ特徴のある面について述べてみたい。まず、各巻の表紙(写真2)に、「普門院」「融賢」と墨書されている。そして、各巻の巻尾には、ほぼ同一の文章が律儀なほどまでに記されている。(写真3)。これについても、納富氏は注目し巻尾の文章を自らの著書(前掲書101頁)の中で活字化されているといえる。この文章を読むと、「応永元年六月 日 沙門融賢^{春秋十九}登壇^三」とあり、普門院の融賢が応永元年(1394)にこのテキストを関東から求めたことがわかる。

なお、本学所蔵の理覚版『華嚴經探玄記』の装訂は、粘葉装で仕上げられている。

次に、もう一点、本学所蔵の『華嚴經探玄記』の刊本について紹介し、そのテキストの成り立ちなどについて記すことにしたい。それは、元禄版の『華嚴經探玄記』(写真4)である。全二十巻の末尾の刊記(写真5)を見



(写真3)

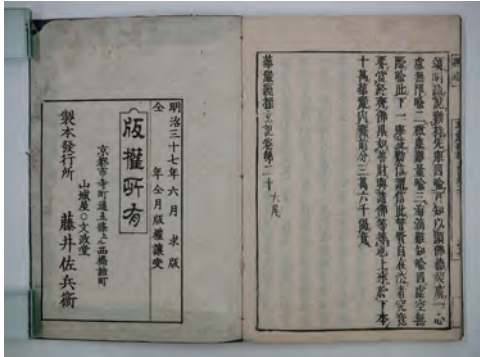


(写真4)



(写真5)

ると、「元禄十六年(1703)」に刊行されたことがわかる。本学図書館所蔵のテキストには、首尾一貫して詳細な書入れがほどこされている。江戸から明治時代にかけての先学たちの真摯な勉強姿勢が窺われるものであり、後学の私たちに仏教研究への指針を与えてく



(写真6)

れる点で、大変、貴重なテキストであると思う。

元禄版『華嚴経探玄記』の各種のテキストを参照してみると、たとえば、写真5には6名の著作権所有者の名が挙げられているが、他のテキストではその名や人数の異なるものも見られる。序文と本文は元本どおりに流通しているにもかかわらず、出版された時代によって著作権者が変わっていくのである。最終的に著作権を得たのは、山城屋文政堂であり「明治三十七年（1904）六月」（写真6）のことであった。元禄版テキストは、初の刊行以来、200年以上の長きにわたってわが国に広く流布したことによって、名だたる仏教研究者たちは、『華嚴経探玄記』を読み、多くの注釈書が作られることとなった。

元禄版テキストが刊行された経緯については、冒頭の「鍔華嚴探玄記序」（4丁分）に記されているので、少し序文について触れることとしたい。序文を書いた人の名は、「日東奥仙臺龍審比丘實養」（写真4）とある。實養の生没年は不詳であるが、江戸中期の新義真言宗の学僧である。智積院の運徹（1614-1693）に師事して真言宗新義派の教学を究めた人であり、のち陸奥（宮城）の龍宝院に転

住した。序文によれば、實養が以前に智積院に住していたところに、『華嚴経探玄記』の「真本」を得たという。自身が病気がちであったため、長い間、「経笥」のなかに貯蔵したままであった。このたび、この「真本」を出版することとなり、その漢文テキストに「和訓」も加えることとしたことが記されている。

少しまとめてみると、最初の理覚版『華嚴経探玄記』は、出版元の金沢文庫に所蔵されているが、本学にも残されたことは貴重なことである。加えて、『大正蔵』の校合本として本学所蔵本が用いられたという点で、大きな役割を果たしたと言ってよいと思う。また、元禄版『華嚴経探玄記』が實養によって出版されたことによって、多くの仏教研究者たちが、手軽に『華嚴経探玄記』を読むことができるようになったこと、その果たした役割は大きかったのである。